

日米医学医療交流財団 留学助成

B 項 研修報告書 (2011 年度 助成者)

作成日 2011 年 10 月 21 日

| | |
|---------|---|
| 氏 名 | 垣内 康宏 |
| 研修先機関名 | University of Rochester Medical Center, Surgical Pathology Department |
| 研 修 期 間 | 2011 年 9 月 28 日～2011 年 10 月 17 日 |
| 現在所属機関名 | 横浜市立大学グローバル都市協力研究センター |
| 分 野 | 公衆衛生 (疫学) |
| 役 職 | 特任助手 |

横浜市立大学グローバル都市協力研究センター公衆衛生ユニットに所属しております、垣内康宏と申します。この度は平成 23 年度 B 項目助成対象者に選定いただき誠にありがとうございました。

私はこの貴重な機会を利用させていただきまして、2011 年 9 月 29 日から同年 10 月 16 日までの約 3 週間の間、米国 New York 州 Rochester 市にあります University of Rochester Medical Center, Department of Pathology & Laboratory Medicine, Surgical Pathology Unit/Genitourinary Pathology Section (以下 URMC) にて、Dr. Hiroshi Miyamoto のご指導の下、「Radical prostatectomy (根治的前立腺全摘出術) における Frozen section assessment(術中迅速病理診断、以下 FSA)の有用性」について研究をさせていただきましたので、ご報告申し上げます。

現在、前立腺がんの罹患率は世界的に急増しており、我が国も生活環境の欧米化とともに同様の傾向を示しております。この前立腺がんに対する治療法の中心は現在、Radical prostatectomy (根治的前立腺全摘出術) になっておりますが、米国では我が国に先んじてロボット支援腹腔鏡下手術が普及しており、それに伴って手術件数も急増しております。しかしながら他の腫瘍と同様に、断端陽性および術後の再発例も少なからず見られ、このようなケースを未然に防ぐために、ほとんどの施設で FSA が行われております。しかし、その精度 (感度・特異度等) に関しては施設間にばらつきが見られ、その有用性に関し客観的な分析が待たれていたところでした。今回私は、URMC においてロボット支援腹腔鏡下手術導入以後の約 2,600 例の前立腺全摘標本を Retrospective に解析し、これまでで最大規模の疫学分析を行うことができました。

今回の研究の成果は、2012 年 3 月に開催されます United States and Canadian Academy of Pathology(北米病理学会、バンクーバー市、カナダ国)において発表予定です。貴重な成果を各国の研究者と共有し、活発な意見交換を行うことで、さらなる研究の発展につなげたいと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった財団および諸先生方に重ねて感謝申し上げますとともに、微力ではございますが少しでも今後の日米の医学医療交流の発展に貢献出来れば幸いです。